
魔女の棲む森

千咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の棲む森

【Nコード】

N1453Y

【作者名】

千咲

【あらすじ】

目が覚めたら不気味な森の古びた館にいた。覚えているのは自分の名がアルバで、魔女であること。そして、世界にとって魔女は異質な存在であること。何もわからないままその館で過ごしているとある日、館の主が国の騎士様が現れて……。シリアス多めの恋愛ファンタジー。

目覚め

ざわざわ。ざわざわ。

最初に耳に入った音は、森のざわめきだった。どこか不気味で、うなるような風の音も共に聞こえてくる。

ゆっくりと瞼を開けてみると一番に目についたのは古びた天井だった。明かりは無く、暗い。起きたばかりだから視界が少しぼやけている。一度ゆっくりとまた目を閉じ、また目を開くと、変わりなくその古びた天井がそこにあった。よく見れば古びているけれどもしつかりとした作りで、高級感がある。どこかのお屋敷なのだろうか？

妙に頭がスツキリしている。ゆっくりと身体を起こしてみると身体も軽い。ギシリと自分が寝ていたベッドが軋む。そのベッドも広くてふかふかだ。

ぐるりと頭を動かし、室内を見てみればどれもこれも高級そうな家具たちが忘れられたように静かにそこにいる。やはり、金持ちの古い屋敷のようだ。

ざわざわ。ざわざわ。

外から変わらず不気味な森のざわめきが聞こえてくる。時折強い風が窓を叩く。

「あ……。」

指先を喉にあて、声を出してみる。少し掠れた、高い声が口から零れた。

ベッドから降りるためにベッドの上を這って端っこへくると真っ黒のパンプスが床にあった。踵の部分を指先で引っ掛けて持ち上げてみれば埃一つ被っていない。履いてみればびったりだった。

立ち上がって壁際に立てかけられている大きな姿見へと近づく。少しばかり足がふらつくのは長い間眠っていたせいだろうか。

姿見に映ったのは幼さを少し残した少女の姿だった。艶やかで真っすぐと腰まである長い黒髪。切れ長のぱっちりとしたシルバーの瞳。白い肌に一際目立つ真っ赤な唇。

ちぐはぐだと思った。自分の容姿に。記憶に。存在に。

鏡の中にいる少女は嘲笑う。

「あなたは、誰？」

「あたしは、アルバ。」

凜とした声が室内に響く。鏡の中の少女は冷めた目で問う。

「あなたは、何？」

「あたしは、魔女。」

「そう。ありがとう。」

最後に鏡の中の少女はにこりと笑った。

アルバはすぐさまその笑みを消し、頭を振る。自分の行動があまりにも馬鹿馬鹿しかったからだ。

「馬鹿みたい。何してるんだろ、あたし。」

あたしはアルバ。魔女。目覚めた瞬間からわかっていた。でも、それだけ。それ以外のことは全くわからない。目覚める前の全ての記憶がない。ただただ空白の記憶の中に、自分の名がアルバで魔女であることだけが浮かんでくる。そして不思議なことに、記憶が全くないというのに一般的な知識はある。目の前に自分の姿を映す物は鏡だとわかるし、言葉も喋れる。……この世界で魔女が、異質だということも。

アルバは振り返り、鏡から窓へと視線を移した。迷いなく指先を窓へ向け、空間を引き裂くように斜めに滑らせる。するとけたたましい音を立て窓ガラスが割れた。

アルバは無表情で割れた窓を見つめる。驚きはなかった。だって、自分は魔女だから。

まるで何かを諦めたかのようにアルバは息を吐き出した。

それから、先ほど斜めに滑らせた指先を巻き戻すようにまた滑らせると床に飛び散った破片がかたかたと動き、割られる前の状態へと戻る。魔法の使い方もバッチリなようだ。

「本当に、ちぐはぐ。」

アルバは現実から目を背けるようにまたベッドへと戻り、身を投げ出した。

一瞬の魔法

「東の森をなんとかしてこい」。そう、王から命を受けたのは1週間程前。

” どうして今更東の森？ ”

東の森とは膨大な土地と民、資源に溢れたサディスティア国の東に位置する森のことだ。サディスティア国は平和な国として知られているが、東の森は凶暴な魔獣や盗賊たちの巢窟であり、一般人は誰も足を踏み入れない土地。誰も足を踏み入れないから、王国側も特別手を付けていない無法地帯だったのだが、本当に、どうして今更疑問を抱きつつもフランは城を出る準備をした。それは4日前のことだ。

「完全にはぐれたな…。」

フランは馬上でザアザアと自分の身に降り注ぐ豪雨を忌々しげに睨みつけ、目にかかる長いプラチナブロンドの髪を片手でかき上げた。城のある王都から馬を走らせて3日。東の森にある遠い昔に忘れられたフランの家の別荘である館を拠点にするため、部下たちと共にそこを目指していたのだが、予期せぬ雨と突如現れた魔獣のせいだ。どうやらフランは部下たちとはぐれてしまったようだ。

容赦なく身体を叩き付ける雨はどんどんフランの体温を奪っていく。

このままではまずいと思い、フランは部下たちとの合流を諦めて一人馬を走らせた。

しばらく馬を走らせていると、大きな木に囲まれた妖しげな館が見えてきた。都合の良いことにそこは、フランたちが目指していたフランの別荘だった。

薄暗い森にとっても良く似合う古びた洋館。近くに崖でもあるのか、ゴォツと不気味な風の音が聞こえてくる。それが増々館を不気味に思わせた。

フランは馬から飛び降り、近くの木へと手綱をしっかり結んだ。

館の鍵は自分が持っているので休むことは可能だろうと思い、館の扉に鍵を差し込み、回す。

しかし、ひっかかる感触がない。

不思議に思いながら、フランは扉を開けると妖しげな音を立て、扉は開いた。まさか、知らぬ間に盗賊たちの集会所にでもなっているのではないだろうか。端正な顔をめんどくさそうに歪ませ、一歩中へと足を踏み入れる。右手はしっかりと腰に指してある刀を握っている。

気配を探りながら歩を進めて行くと先ほど入って来た入り口の扉がけたたましい音を立てて閉まった。たぶん、風のせいだろう。

極力足音を立てぬように気を配りつつ2階に続く階段を上って行く。

館の中は外よりも薄暗く、視界が悪い。心の中で舌打ちをしながらもフランは気を引き締めて館の中を進んで行く。足に迷いはない。

盗賊がいると踏んでいたが、見てみる限りでは大勢の人間が館に侵入した形跡は見つからなかった。

窓を叩き付ける豪雨と、不気味な風の音。いつの間にか雷も鳴り始めたらしく、時折耳をつんざくような音が外から聞こえてくる。

いい加減冷えきった身体を温めたい。

はぁっと吐き出した息は暗がりでも白く浮き上がって見えた。

フランはとある部屋に行き着いた。館の一番奥にある部屋だ。今まで見て来た部屋を考えると、多分自分の先祖の寝室であった場所だろうと思う。

部屋の中から物音はしない。

だが、不思議な気配がする。

その気配は人でもなく、獣でもない。まさか幽霊か？とフランの頭に浮かんだが、馬鹿馬鹿しくなりその考えを振り払った。

一気に扉を開け、中にいるその不思議な気配へと間合いを詰め、喉元に切っ先を突きつけた。室内の空気はとても冷たい。

「人様の館で、何をしている？」

低く低く囁く。自分よりも頭一つ分程背の低いその不思議な気配の持ち主を見下げれば、腕の中で身動き一つせず、ゆっくりと顔を上げた。

「お、んな…？」

思わず口から零れ出た声は自分でも驚く程に頼りなく、掠れていた。喉元に刃物を突きつけられているというのに腕の中にいるそいつは無表情でただぼうつとフランのことを見つめた。腕に当たるさらりとした長い黒髪がこそばゆい。

フランも呆然と腕の中にいる女を見つめる。否、目が放せないのだ。雪のように真っ白な肌に一際目立つ真っ赤な唇。腰まで流れる黒い髪。そして、ガラス玉のようなシルバーの瞳。

まるで職人が丹誠込めて作り上げた人形のような美しい女。

引き込まれた。今にも壊れてしまいそうに揺れるその瞳に。一瞬で。

見つめ合う時間がまるで永遠のように感じた。

一次休戦

「誰…？」

ぼつりと呟かれた言葉にフランはハッと我に返った。わけのわからない目の前の女に見惚れるなんてどうかしている。

「お前こそ誰だ。ここは俺の館だぞ。」

「あなたの、館なの？」

ゆっくりと真っ赤な唇から紡がれた問いにフランは首を傾げる。

東の森は普通なら一般人は決して立ち入ることはしない。盗賊や犯罪者なら仕方もないが、目の前にいるのは女だ。もしかすると、盗賊たちに誘拐されたのかもしれない。容姿も容姿だ。それなら頷ける。

一つの仮説に辿り着いたフランはどうしようかと悩んだ。仮説は仮説だ。このまま身を引くわけにもいかない。

フランが黙り込んでいると目の前の女が眉間に皺を寄せた。

「……っ!？」

すると、突如腕に違和感を覚える。動かない。

なんとかしようともがけば筋が引きつるように痛みが走るだけ。つい、しっかりと握っていた刀を落としてしまった。気付けば女は腕の中から抜け出し、少し離れた位置から冷たい目でフランを見ていた。

「な、にを、した…？」

背筋に冷や汗が伝う。冷静になるようフランは自分に言い聞かせる。

「突然、刃物突きつけるほうがおかしいじゃない。」

「勝手に館に侵入したお前が悪いんだろ。」

「…勝手に？」

女は顔を幾分か引きつらせる。感情表現が苦手なのか、ほぼ無表情には変わりはない。

「知らない…。あたしだって、どうしてここにいるか……わからないんだから。」

まるで独り言のように女は言った。憂いを帯び、ゆらゆらと揺れる銀色にフランは再び見入る。その瞳にただされるように、フランは口を開いた。もう、もがくのは辞めた。

「……わかった。一次休戦だ。お前の話を聞く。それはお前が持っていていい。」

それ、とフランは自分が落とした刀を顎で指した。少し迷ったように刀とフランを交互に見やった後、女は流れるような動作で床に落ちた刀を手取る。それから、フランに指先を向け、横にスッと引いた。

宙で固まっていた腕が自由になる。フランは一つ長く、息を吐き出し、近くにあったベッドの端に腰掛けた。忘れていたが、今更になって雨に濡れた身体が冷えきっていたことに気付く。

「さみっ…」

思わず呟くと、未だ警戒心の籠った視線をこちらに向けていた女が困ったように眉間を寄せた。女は両手に抱えていたフランの刀を片手に持ち直し、掌を返し、口元に持って行く。ふうっと女は息を吐いた。

女の行動を黙って見ていたフランは冷えていた身体が徐々に暖まっていいくことに気付く。濡れていたモスグリーンの軍服もすっかり乾

いていた。

「どう、なってるんだ？…魔法みたいだな。」

軽く笑みを浮かべながらフランは言う。フランらしくない言葉だった。女は先ほどと変わらずその場に突っ立ったままフランを見ている。

「魔法だよ。」

「は？」

「だって、あたし、魔女だもの。」

軽口で言ったつもりが本気で返されてしまい、フランは言葉をなくす。女の目は確かに本気だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1453y/>

魔女の棲む森

2011年11月4日05時21分発行